

日本におけるイヌワシ (*Aquila chrysaetos*) の現状

イヌワシはヨーロッパからロシア、ネパール、モンゴル、北アメリカなど北半球の高緯度地域に広く分布する大型の猛禽類です。世界のイヌワシの繁殖地域は北緯 70~20 度であり、草地や低灌木地などの開けた自然環境の中に、営巣場所となる崖や大きな樹木のある丘陵地や山地が広がっています。

森林に覆われた山岳地帯はイヌワシ本来の生息場所ではなく、日本のように山岳森林地帯にイヌワシが生息するという事はきわめてめずらしいことです。イヌワシには 6 亜種が認められており、日本に生息するニホンイヌワシ (*Aquila chrysaetos japonica*) がその中で最も小型であることは、森林環境に適応したものと考えられています。

日本に生息するイヌワシの近年の生息状況はきわめて厳しく、絶滅の危機に瀕しています。イヌワシの繁殖成功率 (少なくとも 1 羽の雛が巣立ったペア数/繁殖成否が明らかになったペア数) は 1981 年から 1985 年までの 5 年間では平均 47.2% ですが、近年の全国的な繁殖成功率は 25% 程度であり、1980 年代前半と比較して著しく低下しています (日本イヌワシ研究会)。

さらに、1986 年以前の日本におけるイヌワシのつがい数は 340 と考え

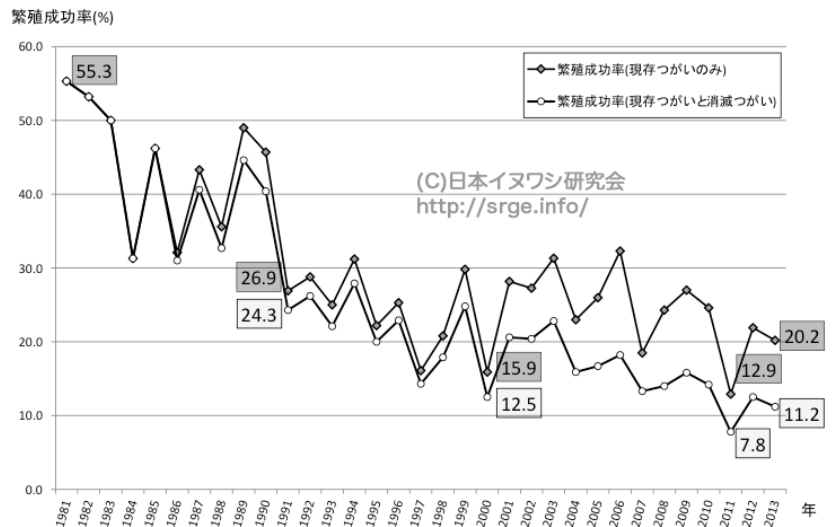


図. 日本におけるイヌワシの繁殖成功率の推移 (日本イヌワシ研究会)

られ、2013 年までにそのうち 99 つがいが生息地から消滅しています (日本イヌワシ研究会)。

日本のイヌワシがこのような危機的な状態に陥った背景には、主要な生息地である山岳地帯における森林環境の劇的な変化が考えられます。1990 年頃から全国的にイヌワシの繁殖成功率が急激に低下したのは、1950 年代から開始された拡大造林政策によって植栽された スギ・ヒノキ等が伐採搬出可能なまで生育したにも関わらず、市場価値の低下により伐採されなくなったことから、山岳地帯に成熟した人工林が拡大するとともに、伐採地が激減したことが要因の 1 つであると考えられています。

北上高地に生息するイヌワシの調査では、幼齢人工林と低木草地の減少と成熟した人工林、農地の増加がイヌワシの好適な採餌環境の減少を引き起こし、北上高地における近年の繁殖成功率の顕著な低下につながっているのではないかと考察されています (由井ほか 2006)。また、北上高地に生息する 24 ペアのイヌワシを対象とした調査から、落葉広葉樹老齢林、幼齢人工林、伐採後 5 年以下の広葉樹林や放牧採草地を含む低木草地の各面積が広いと繁殖成功率は高くなったと報告されています (由井ほか 2005)。

以上

<引用文献>

日本イヌワシ研究会 ホームページ (2016 年 10 月 8 日時点) <http://srge.info/>  
 環境省自然保護局野生生物課. 2012 猛禽類保護の進め方 (改訂版)  
 由井正敏 他. 2006. 希少猛禽類イヌワシとの共存を目指した森林施業法の確立.  
 由井正敏 他. 2005. 北上高地におけるイヌワシ個体群の繁殖成功率低下と植生変化の関係.  
 樋口広芳 他. 2013. 「日本のタカ学」